

この小さい星を走れ

A i s a a c

空。砂。快晴の太陽。滑らかな路面からは塵埃が浮かび出る。その上をランサーたちはかき消すように一瞬で通り過ぎる。

先頭を走るランサーは旧式ではあるが、性能面でバランスの取れている汎用機だ。カスタマイズされており、軽量化と空気抵抗の軽減が図られている。流線型の先端が旧時代の高速鉄道に似ていることから『のぞみ』だとか『イタロ』とか呼ばれる。もともと、速度は比べ物にならないほどそれより速いが、追いつがる数々の機体を弾き返し、トップの座を固守している。

しかし、一際大きな鉄槍が波を押し分けるように先頭のすぐ後ろにつく。他の機体より二倍近くあり、大会に定められている上限ギリギリの大きさである。普通は居住性を無視した小さく設計される操縦席にも大人が二人入れる。そのあまりにも巨大な鉄香車は一本の槍ではなく、槍を構えた重騎士にさえ見える。

「俺の道を阻むものはお前か」

操縦する機体同様、時代錯誤な赤いマントを身につけた巨大な筋肉の塊のようなそのパイロットは呟いた。巖のような顔を揺らめく憎しみ、怒りで歪ませている。見る人によっては笑みを浮かべているようにも思えるかもしれないだろう。

「マルク、ブーストをかける。サポートをしろ！」

複雑な思いを断ち切るように彼は命令を下す。

『イエス、サー！』

無縁越しに聞こえる声をかき消すようにタービンがう

なりをあげる。速度が増すごとに機体に振動が走る。

「マルク！ しつかり制御しろ！」

『ダメです！ E L F の進路が滅茶苦茶で修正計算が追いつきません！』

彼は歯を食いしばり、ターボエンジンに燃料を投下する。メーターから燃料が少なくなっていく。しかし速度計はすでに振り切っており、想定されていない速度に突入していた。

『ジェイ！ これ以上は制御が追いつきません！ 速度を抑えてください！』

しかし彼は燃料投下レバーを最大限まであげきり、無縁に怒鳴る。

「馬鹿者！ 速度を下げてレースに勝てるか！ パイロットは俺だ。その俺がスピードを上げて操縦桿を握っているのだ。サポーターのお前は死力を尽くして機体を安定させる。貴様の仕事を全うするのだ！」

無縁の向こうから歯の奥の軋む音が聞こえる。しかし機体の安定性が保たれたのは一瞬だけだった。すぐに機体の振動は激しくなり足元から何かに衝突する音が噴き上がる。男はすぐに燃料供給レバーを押し下げ、操縦桿を両手で握り直す。制御は思いの外難しく、機首が引き込まれるのを感じた。機体を上げる間も無く地面に打ち付けられる。振動が伝わり、姿勢の安定どころではない。機体はすぐに横回転を始め、周囲のランサーが弾き飛ばされる。そして、コース左右のバリアーに何度もあたり、巨大な金属の塊はコース外に停止した。

「やれやれだ……」

操縦席のハッチを開け、男は立ち上がった。ヘッドギアを外し、コースを見渡す。色から形まで様々なランサーが彼を追い抜いていく。苦渋がその顔に刻まれる。

「くそっ！」

叩きつけられたヘッドギアが宙を舞った。

巨大な鉄香車を横目に青い閃光のような残像が走る。

「おい、見たかよ！ チェシー」

黒いライダースーツとヘルメットを身につけた青年はハンドルを叩いた。

『ハイハイ、ちゃんと前見て運転してねー』

無縁からのんびりとした少女の声が聞こえる。

「けどよー、あの“騎士王”がだぜ？ 前回レースのチャンピオンだぜ？」

青いランサーは先ほどの事故に巻き込まれた機体の残骸を危なげなく避けていく。

「あいつの走りは見えていて爽快なんだ。システムなんてただの補助装置で機体のスピードと加速性能を明確に押し出した運用思想！ あれだけの加速を生身の肉体で耐えきる漢ぶり！ 彼の走りは頭のネジがどこか飛んでないと無理だね。いや、案外頭の中全部筋肉でできてるかも」

彼はうっとり一人であぐらをかき。

『はあー、アンタのつまらない独り言は仕事中に聞きたくないんだけどー。あと、脳神経とかはタンパク質でできてるからあながち間違っていないかもよー』

無縁からはため息と呆れ百パーセントのつぶやきが返された。

「意味不明なツッコミありがと。難しいことはよくわからんからお前さんに任せたい！ 俺は先頭に追いついてみせる！」

アンタがよくわからないボケかますからでしょー、という返事に意味のないウインクをして、彼はアクセルを

踏む。機体から電撃が走り、青い閃光はランサーたちの間を駆け抜ける。

「全財産をつぎ込んだんだ。どんな手を使っても一位を取らせてもらおう！」

戦争行為が国連の名の下に禁止されて数十年。それはあらゆる国という存在の崩壊をもたらした。そして到来したのは富と繁栄の世界だ。経済が全てを動かす時代。いくつかの巨大な元多国籍企業の下に無数の協力企業が連なり、そこには膨大な数の従業員が所属する。彼らはその企業連合の恩恵の下で暮らし、企業連合のために活動する。そこに賃金は必要なく、人々は自らの生活を自らの信念に従って全うしていく。とある歴史家は社会主義の時代が来た、と評した。企業のモデルを国家の如く機能させるには組織の上部から末端までの意識統一が必要である。そして、待遇の違いこそあれすべての人が等しく働き、分配がなされる。分配の際に少し差が出るが、生活を維持するだけの必需品はもらえる。プロレタリアート社会と一つ大きな違いがあるとすれば他の企業連合との「競争」があることか。

なくならなかった小さな競争は賭博の領域に色濃く現れた。競馬、スロット、カード。その中でも科学技術の粋をあつめて行われるスピードレースは膨大な対外取引が行われる分野だ。F1レースから発達したそれはランサーと称されるマシン。3時間で二万キロを走り、順位スコアタイム、撃墜数を競う。ランサーはひたすら速さを求めて作られ、その姿形も様々だ。参加するメーカーは企業連合傘下の大企業はもちろんのこと、ごく小さな独立企業体も自らの技術力を頼りに参加する。

「で、タカちゃんはあるな啖呵切つておいて四着ですか

ー？」

薄暗いピットにのびやかな少女の声がこだまする。その声色には嘲笑が微かに混ざっている。

「う、うるせえ！ ちゃんと最高速度が出てたら追いついてたんだよ！ というか時速四千キロ出るんじゃないのかよ？」

タカオはランサーの下に上半身を突っ込んで整備に勤しんでいる。台詞の合間に金属の軋む音が聞こえる。

「ねえ、それは理論値だつて前言ったよねー？ 理論値の意味わかってるー？ いろいろ条件を無視して、気温二十四度、定点を一定数のELFが常に通ると仮定した上での理論的な最高値のことー」

「ごめん、何言っているのかわからん」

「要するに現実世界で整った環境があつても出ないスコアなのー！ あんな砂漠の真ん中で路面の温度が高くなつてるときにそんな速度でないよー。それにレース前にちゃんと聞いたよねー？ 今回はそんなにスピードでないから注意してねー、つてさー。まさか聞いてなかったのー？」

「そんなこと言ってたか？」

「このバカドリ頭ー！」

仰向けで機体の調整を行う彼に、容赦ない言葉が突き刺さる。ランサーの下から姿を現した青年は少女を睨みつける。薄暗い室内の中でも金色の髪の毛が輝いて見える。

「まったく、好き勝手言ってくれる。ほら、配線の整備終わったからチェックしてくれ」

「待つてましたー。起動よろしくー」

タカオはヘルメットをつけ、操縦席にイグニッションキーを差し込む。システムが起動し、操縦席全体にわず

かな振動が走る。それに呼応して青い筋が機体全体に染み渡り、表面を青く染めていく。ランサーは反重力装置と推進装置の組み合わせによって走る。ピット内で走るのは危険なのでもちろん推進装置には燃料供給をしない。しかし機体がふわりと浮き、そのまま走り出してしまいうような感覚にとらわれる。

『安定性は問題なしー。電力消費量はロスも少ないねー。線変えたのー？』

反重力装置を起動させると周囲の音波が歪んでしまうため、会話は特殊な周波数でやり取りする無線で行う。

「そうさ。社長がボーンナスクれたから買ったんだ」

『まあ自分の食費削つたのー？ ちゃんと食べないと倒れるよー』

『お前はお母さんか。気合でなんとかなる！』

『気合でなんとかなるなら救急車はいらんでしょー。あとお母さんはやめてねー』

又のキーボードを叩くリズムミカルな音が声に合わせて聞こえる。彼が二年前にプレゼントしたものだ。そろそろ新しいものに買い替えてあげよう、彼は胸の内ですう呟いた。

『ありがどう、今日はここまでー』

反重力装置の電源を切り、機体にシートをかける。薄暗い室内に佇む埃っぽい塊が今の彼らの唯一の財産だ。『おーい、チェルシー、タカオー！ おつかれ。これからメシか？』

ピットから出ると小肥りの中年男が声をかけてきた。砂漠を抜けてきたせいか、雨粒大の汗をハンカチで拭いている。

「社長！ いつもありがどうございます」

「おー、社長ー。そんなに急いでどうしたのー？」

彼の顔はいつになく穏やかだ。タカオが初めて出たレースで惨敗を喫した時などは二時間ほど怒られたし、他のレースでも三位以内に入っていないとなんとなく不機嫌になるというのに。

「二人とも揃ってるな。これからメシに行くぞ。安心して、奢ってやる」

それだけ言うと彼はさっさと歩き出した。二人は顔を見合わせて首を傾げていたが彼が振り返って手招きしたのをみてついに行くことにした。

案内された場所はレーサーに用意されている食堂ではなかった。床は安っぽいサイリウムではなく絨毯が敷き詰められ、天井には巨大電球の代わりにシャンデリアがぶら下がっている。全く見慣れない景色に彼らは場違いな感覚を覚えた。タカオもチェルシーもそれぞれライダージャケット、淡いピンクのガーディガンだ。社長もスーツを着てはいるが、かなりよれている。ドレスコードを全く無視している一行をしかし、ウェイターは恭しく出迎え、案内する。

「お前らもつとマシな服なかったのかよ」

社長が先頭を歩きながら愚痴る。

「でも社長だって人のこと言えないじゃないですか」

「おま、ちょっと」

チェルシーが躊躇なく言い返す。彼女は常に自分の目の上の方であっても周囲が気にしていることを言っている。恐れを知らない女だ。

「だ、大丈夫だ。持っている中で一番上等なやつだから」

「自分の持ち物の中で比較してどうすんだよ」

「なんか言ったか？ タカオ」

彼のつぶやきには即座に反応して睨んだ。なぜ自分だ

け、と思うタカオだったがテーブルにつき、メニューを見るなりそんな思いは吹き飛ぶ。

「社長、桁一つ間違えてないか？」

食事というのは時代が変わっても人々を楽しませる。

ゆえに、企業連合内で流通していない食事というのは対外経済活動の主軸ともなっている。しかし流通にかかる費用が高く、お金持ちの道楽とも称されるだけあって、非常に高価だ。最低でもいつもの食事の五倍の価値を持っている。しかしこのレストランではいつもの食事の五十倍の値段を要求されるらしい。

「すごいだろ。一回来てみたかったんだよなあ、こういうところ」

社長の目がいくらかキラキラしている。ついでに額も汗でキラキラしている。

「お前たちも好きな頼みなさい」

社長はウェイターを呼び、注文をする。タカオは訳のわからないまま適当な料理を指差す。チェルシーはサラダだけ頼んだ。

「おい、チェルシー。食欲ないのか？」

「仕事した後の一口目は重要ですから。あと、社長」

その発言はセクハラですよー

彼女の指摘を歯牙にもかけず、彼は話を続けた。

「ところで、料理が来るまでに話しておきたいんだが、いいか？」

ここに来るまでずっと抱いていたモヤモヤ。社長の様子がいつもと違うことにタカオは気がついていて。チェルシーもその言葉に反応をする。彼らは意を決して頷く。

「先のレースはよく頑張った。件の騎士王が事故ったのは驚いたが、あれで彼の勢いは落ちるだろう。優秀なサポートが起用されない限り、彼の頭上にはあの“桜色”

が付いて回る。それでなくともこのレースはランサーたちの中でも一番有名な『グランプリ』だ。参加数も五十と多い。その中で一桁をもぎ取ったのはお前たちの実力のおかげだ。今までお前たちに」

「社長、思い出話は料理が来てからにしましょう」

彼が過去の話をすると一つのネタで小一時間は経ってしまう。タカオは思い切って制止した。料理が冷めてしまつてはもったいない。

「あ、ああ、そうだな……。まあ、つまりお前たちは我が社の優秀なランサーチームだということだ」

社長は一瞬戸惑ったが、すぐに話を戻すことに成功した。

「そして、一つ相談なんだが」

彼は身を乗り出して声をひそめた。

「我が社の、グロリアスエレクトロニクス社の社員として正式なランサーチームの立ち上げに加わってほしい」

全く思ってもみなかった提案にタカオは狼狽した。

「なんですって？ ずっと社長のところでランサーに乗

れってことですか？」

彼の反応を不服と受け取ったのか、社長は慌てた様子

で「いやいや、君にはパイロットのスカウトと指導をしてほしい。どれだけ優秀なパイロットだとしてもレース中に死ぬ可能性だってある。貴重な人材を失うわけにはい

かん」

普通の人ならば承諾するだろうか。独立企業とはいえ、レース業界では名の知れた会社だ。そこで雇ってもらえば生きていくのに困らないだろう。しかし、タカオは自問する。自分が財産をつぎ込んで作ったマシンとランサーに乗ることへの情熱をそんなものに変えてしまつて良

いのか。

「社長、いい話ですね……しかし」

「私はどうすればいいんですか？」

彼女の言葉にハッと我に返った。

「お前にもちゃんと用意してある。お前には開発部門の主任になってもらう」

彼女は唇に人差し指を当てて少し思案していたが「まあいつか」とだけ呟いた。

「どうだ、タカオ。彼女は賛成だそうさ。あと決めるのはお前だけだ」

彼女が了承したことは彼にとって意外だった。どこかで自分についてきてくれると思っていたのかもしれない。決めかねている自分に合わせて一度断る、そう思っていた。そんなことを考えていると、料理が運ばれてきた。

社長は苛立ちを見せたが

「やれやれ、時間はたっぷりある。もう少しゆっくり考えてみな」

といって料理に手をつけ始めた。

料理の味は覚えてない。自分が欲しいのはあのレース中に感じる高揚だけだ。そう思っていた。だが、予想以上に綱渡りの生活が彼からリスクに向かう勇気を覚悟を奪っていたのかもしれない。彼は自身に裏切られたような気がして夜の街を歩いた。砂漠の端のこの街を乾いた涼風が駆け抜けてゆく。

「どうしたの、タカちゃん？」

チエルシーは何も言わないタカオの後をついてきていたが、やがて痺れを切らして口を開いた。

「さっきの話のこと？」

彼はうなずいた。口を開けば自分の中身が全てこっち

や混ぜになつてぶちまけられるような気がした。彼は頑として口を開こうとしない。

「私は社長の話は魅力的だと思うよ。私機械いじり好きだし、ランサーのシステムの開発ができるのはもっと嬉しいよ。試したいことも沢山あるし。でもねー」

彼女は言葉を切った。そして背を向けた。

「もつと優先したいことがあるの……もつと大事なね」

彼はそれを尋ねることはなかった。そのかわり、

「俺はちゃんと考えてみる。社長の話のこと、将来のこと」と

問題を先送りにした。いつのまにか月は中天にかかっている。満月はいつもより明るく夜を照らしていた。

「ひとつ言っておくね。失敗してもいいから自分で真剣に考える人、素敵だと思うの。じゃあねー」

彼女は微笑んで手を振った。月光と見紛うほど真っ白な後ろ姿が、赤いベレー帽が目につく。彼女は自分に気を遣ってあんなことを言ったのではないか。そう誰何しても残像は答えてくれない。

波が碎ける音が聞こえる。考えにふけっているといつの

まにか街の外れに来ていたらしい。外壁の代わりに台地の上に作られたこの街は階段で外と行き来する。外は果てしなく続く砂漠だが、西の方角には本物の海が広がる。砂の海の向こう側に見える水たまりは壮大で、タカオはしばらく頭を空にしてその風景を見つめていた。

「ひとり、ですか？」

ふと、背後から声が聞こえた。聞き覚えのない女性のものだった。

「ん？ ええ。まあ」

つい返答が気の抜けたものとなってしまう。それは彼が単に彼女の美しさに見とれてしまったからだ。彼女の

肌と髪は月光を受けて黒く輝いていた。白い簡素なドレスはこの世で一番高価な布を使った服よりも価値のあるものに見えた。鷹のような鳶色の鋭い視線と優しい声色は相反するものであるにも関わらず、不思議と調和し彼女の美しさを高めている。

「隣、よろしいですか？」

「え、ええ、ど、どうぞ」

しどろもどろになりながらわずかに体をずらす。ふわりと漂うのは乾いた花の匂い。手を伸ばせば届く距離に座った彼女は物憂げに海を見つめていた。タカオも彼女に倣って海を見つめる。永遠に続くと思われた時間も彼女の一言で終わりを迎えた。

「ランサーのパイロットの方ですか？」

「ええ、まあ。あなたは？」

確かにタカオはライダージャケットを着たままだ。しかし彼女はどうかだろう。普通のパイロットが身にまとうあのどこか投げやりな雰囲気は見られない。

「私です」

なので彼女の返答は思っても見なかった。どこをどう見れば『自分の命を金に変える職業』と揶揄されるランサー乗りだと思っただろうか。

「へえ……これまた物好きな方ですね」

失礼だと思われるのも承知で彼は挑発的な物言いをした。陰でどう言われてもランサー乗りは彼の誇りだ。しかし彼女は笑いながら

「そうですよね。自分でも困っちゃうくらいです」

と言つてのけた。その表情に嘘はなかった。おそらく彼女は真正銘のパイロットに違いない。

「驚いたよ。君みたいな美しい人があんな油と血に塗れた欲望の渦にいらなんて」

「あら、お上手ね。でもそんな不思議なことじゃないと思うわ。看護師の半分は男性、五つの企業連合のうち、三社はBOが女性。数十年前まで性差が見られた仕事も今ではほとんどないわ。ランサー乗りにも女性がいてもおかしくないでしょ？それにランサーのシステムを構築・運用している人の七十パーセントは女性よ。ロエンニアはそれこそ男性優位の社会だったじゃない」

彼女の言葉は確かに的確に的を射ていた。しかし、グランプリが人々の欲望を多量に孕んだ場所だということには否定しなかった。

「もうひとつ質問していい？」

複雑な気持ちを手持ち無沙汰に弄んでいると、再び彼女が口を開いた。タカオは黙って頷いた。

「あの塔が見えますか？」

彼女が指差したのは星が散りばめられた夜空、それに溶け合った黒い水たまり。そして白い砂の海原。そこには均された水平線しかない。そこに突き出たものは何もない。

「……？」

「いいんです」

どう答えたものかと思案していると、彼女は言葉を引き継ぐ。彼女は海の見据えている。その横顔はこの世界にはいない。タカオは刃のようなその雰囲気にもれつつも、理解したいと思った。

「俺も見えるようになるかな？」

ぼつりと呟いた彼の独り言に彼女は曖昧に微笑みただけだった。砂を攫う波の音が二人の間を吹き抜ける。

彼女はいつの間にかいなくなっていた。乾いた風に乗って古い置き時計の匂いが鼻をくすぐる。彼は立ち上がった。できることはひとつ。彼女の見える景色を目指す

そう。彼は決意した。

乾いた大地を抜けると鬱蒼とした森の広がる熱帯雨林のエリアがランサーを待ち構えている。高温の路面状況から解放される代わりに今度は視界の悪さがパイロットを苦しめる。

『さあ盛り上がってまいりました！ランサーズグランプリ2054の二日目ももうすぐで始まるぜ！一日目の結果はなんと前回のチャンピオンであるジェイ・パトリオットがランク外に転落！代わりに暫定一位が謎のライダー、“タオ”！桜色のスーツにピンクのヘルメットをかぶったこいつは何者なのか！？果たして二日目も他者を寄せ付けない圧倒的な走りを見せてくれるのか、元チャンピオンが王者の意地を見せつけるのか、それとも戦国時代と化したレースに新星が再び現れるか！今日も目が離せない展開が繰り広げられそうだな！さて、レース開始までこのヘラスのトークについてこい！』

叫ぶような熱い口調のナレーションと観客達の熱狂的な歓声がピットの中にまで聞こえてくる。タカオとチェルシーは終始無言で出走までの準備を進める。前日に終わっているはずの確認を二人は示し合わせたように行う。電気系統の確認、推進装置と発電機への燃料供給と燃料の残量、システムと機体の接続テスト。それなりの量のタスクを二人は無言のまま、テキパキとこなしている。動作はよどみないが、交わす言葉はいつもより少ない。

「タカちゃん」

「チェシー」

二人は全く同時に互いを呼んだ。二人はしばらく無言だったが、同時に吹き出して声に出して笑った。

「で、何？チェシーからどうぞ」

「うーん、ちゃんと生きて帰ってきてねー」

彼女は黒いヘルメットを彼に渡した。側面には『&C』二人のイニシャルが繋がれたロゴが刻まれている。ランサーのグロリアスエレクトロニクス社のステッカーも貼ってあるが、それと同じくらいのサイズだ。

「ああ。当たり前さ。いや、それどころじゃない」

彼は自信たっぷり彼女に言い放つ。

「一位に追いついてやるさ！」

彼女の表情が軽く緩んだ。

外ではナレーションの演説がちょうど終わったところだった。湖面ように静まったコースに出場機体が専用のレッカー車によって運ばれてくる。初日の五十二体から半分が減った二十六体でのレースが幕を上げる。

「タカちゃん、レディー？」

「レディー。アズール、始動！」

表面が青く染まっていく。紺碧の槍は意思を持って起動した。

砂漠エリアを抜けると待ち構えている熱帯エリアは高層ビルほどもある高さの木が乱立する。これらの間を縫うように走るのだが、道が曲がりくねっている。もしコース脇のバリアーに衝突し運が悪いと、そのまま突き抜ける。コース外は巨大な木々、沼、岩、危険な動物が荒々しく部外者を迎え入れる。その結果は死のみ。それでもランサー達は先を競い、順位が入れ替わる。

視界の悪いコースから逃れると、広大な草原が広がる。なだらかな平野が広がる。前半でついでにしまった順位の差を覆すことは非常に難しい。そんな中、タカオは三位の黄色いランサーと競い合っていた。

『タカちゃん、システム面は問題ないけど、前に出るの難しい?』

彼女はまだ余裕そうだ。

「相手の後ろを取ってるから、チャンスがあればいける。コースにコーナーはないか?」

『ないね』

三位との距離はもはや触れるか触れないかの瀬戸際だ。距離から考えるとあと五分でゴールにたどり着いてしまふ。それまでに相手を抜くことのできるカーブはない。

彼は焦りを感じた。何を優先させるか? 走ることか? 順位を上げることか? ふと昨夜の女性の姿が脳裏をよぎった。彼女はどうか考えるだろうか。みえないものが見えている彼女はどうかだろうか。

「チェシー、ちよつといいか?」

彼女は『はい』といつものように間延びした声をあげる。

「相手を傷つけてまで勝利を得るべきだろうか?」

彼女はしばらく考え込んでいたが、

『うーん、それは間違ってるんじゃないかな』

でも、彼女、はどうだろうか。彼女は、一人で塔を見ている。ならばとる道は一つ。

「少し暴れるから制御しておいてくれ」

『え? それってどういう?』

彼女の言葉を待たずに彼は機首を下げ、前方のランサーの下に潜り込む。地面に接触するギリギリを見極める。そして、勢いよく上昇させる。速度の乗った尖った先端は反重力装置を傷つけ、破壊した。黄色い機体は制御をあっさり失い、地面に底部を擦り付ける。タカオはさらに機体を横に一回転させ、停止したくすんだ黄色の棺桶を後方に受け流す。

『何、してるの……?』

無縁越しに彼女の声が聞こえる。その声に感情はなかった。タカオは何も言わずにゴールラインを超えた。背後では煙が上がっていた。

ランサー同士のレースで相手を撃墜することはもちろん認められている。タカオの順位は前日からひとつ上がって三位に上がった。撃墜数も一機となった。間も無く黄色い機体のパイロットの死亡が確認された。

薄暗いピット内は再び沈黙に包まれていた。アズールは整備された状態で放置されている。タカオは、機体にもたれかかって人形のように身じろぎひとつしないチェルシーを見つめていた。窓からさす夕焼けの光を受けて彼女の白磁のような肌は朱色に染まっていた。

「ブラインド、下げようか?」

タカオは恐る恐る尋ねる。彼女の反応はない。彼は窓に近寄ってブラインドを閉める。

「なんであんなことしたの? ねえ、なんであんなことしたの?」

彼女は顔をうつ向けたままだ。悲しんでいることだけはわかった。

「順位を上げたかっただけだ。ただそれだけだ」

自分でも驚くほど声に感情がなかった。確かに黄色のランサーのパイロットには申し訳ないことをしたが、このレースはそういうものはずだ。タカオは繰り返し自分に言い聞かせる。彼女にゆっくり歩み寄る。

「そんなことでこれが許されるの? タカちゃんのしたことば殺人じゃないの?」

ふと彼女の口調が厳しいものになっていることに気がついた。彼は自分を取り返しのかんがえないことをしたことを悟った。

を悟った。

「いいや。殺人じゃない。彼は俺の進路を妨害したんだ。俺はそれに対して自分の権利を行使したに過ぎない」

そのはずだ。彼のしたことは「スコア」として大会に記録される。罪として問われることもない。理由はいろいろあるが、賭けの公平性を保つためとされている。それでも彼女は彼のしたこと傷ついていた。彼女は何を思っただけで傷ついているのか、今のタカオに知る術はない。彼女は彼と目を合わせようとしない。

「俺は今までより先を指したい。ただ走るだけじゃ見えないものを見たいんだ」

その瞬間、乾いた音が響いた。左の頬が熱を発している。

「人を殺して見えるものって何!? それは人の命より価値のあるものなの? ただ走ってるだけのあなたは輝いていた。私をあの研究室から連れ出した時を思い出して。ただ走ることに夢中だった時を……」

彼女は言葉を切った。瞳ははつきりと濡れていた。

「ごめん、ごめんチェシー」

彼女のそばで片膝を立てて座り、その手を握る。彼女が泣き止むまで彼はずっとそこにいた。

やがて泣き疲れた彼女をタカオはホテルに送った。彼は夜風にあたるために再び街を歩く。かつて上海と呼ばれたこの都市は人ごみで返す活気のある場所だ。夜になっても絶えない人気に彼は流され、彷徨った。ふと、町の外れに出たことに気がつく。瓦礫が散乱した陰気な雰囲気に彼は嫌な予感を感じてきた道を戻ろうとした。

「やめてください!」

突然、くぐもった声がした。女性の声だった。誰か襲われているのか? タカオは急いで声のする方へ向かう。

路地の裏側、さらに奥に彼らはいた。三人の男が一人の女性を囲んでいた。一人は彼女の手首を掴んでいる。タカオは咄嗟に石を拾い、力一杯投げた。それは彼女の手首を掴む男の後頭部に当たり、男は痛みに耐えるように呻き声を上げてしゃがみ込んだ。タカオは彼らに走り寄り、二人の男を突き飛ばして彼女の手をにぎる。そして無我夢中に走った。

彼らは大通りに程近い通りに出た。人は少ないもの、叫べば警備員が飛んでくるだろう。

「ここまでくれば大丈夫だろ」

彼女は奇妙な格好をしていた。桜色のライダースーツ、ピンクのヘルメット。どこかで見たことのある出立だ。そういえばグランプリの暫定一位はこんな格好ではなかったか。

『ありがとうございます……あれ、あなたは』

彼女は首を傾げた。タカオも首を傾げた。知り合いにこんな人はいない、はずだ。

『あの砂漠の人じゃない』

覆いの下から現れたのはあの女性だ。昨日と同様、月の光を受けて黒く輝いていた。

「もしかして君は……」

「申し遅れました。タオと言います」

初日で前回のチャンピオンを下した選手その人だった。

彼は幼馴染みだ。初めはとある養育院で育てられた子供たちの中の二人だった。彼も私も全体から見ればとるに足らない子供だった。そんな中でずっと近くにいた。それが私と彼の永らくの関係だった。生活の八割は近くにあった。

勉強の机は隣同士だったし、食事の時も一緒だった。

修学旅行で迷子になった時はずっと手を握ってみんなを探していた。基礎教育が終わり、十六歳になった私たちは初めて離れ離れになった。就職する同期生がいる中、心理学と経済学に適性を示した彼は経営者養成コースに、私は情報科学者のコースに進んだ。

研究所では幾度も研究と実験を重ねた。研究内容は感情の発生についてだった。それは同時に自分自身の研究にも繋がった。なぜ自分は泣かないのか、なぜ自分は笑わないのか。なぜ自分は彼に「ありがとう」の一言も言えないのか、それを研究した。

「ごめんさい」

言葉が口からこぼれる。彼の頬を張った感触はまだ右手に残っている。掲げてみても肌は白い。月光に照らされて輝き、シーツの上に黒い染みを作る。生活を賭けてレースに出ている以上、彼を責める必要は全くない。どこかの企業に属していない限り自分の生活が保証されることはないのだから。それでも私は彼のしたことに対してなんとも言えない感情を抱いた。初めて自分の心に現れたその感情を彼にぶつけるより他なかった。怒りとも、嫌悪感とも違う。ましてや喜びとは正反対だ。

「わからない、わからないよ」

私は枕に顔を埋めて感情の渦に耐えた。

「本当に君が同業者だとは思ってなかったよ」

しばらく一緒にいて欲しいと言われ、タカオとタオは近くの喫茶店に入ることにした。閉店間際の店の中に客は数えるほどしかいない。二人は窓際の席に座った。

彼女がどうして人気のないところにいたのかあえて聞かなかつたし、彼女も聞いて欲しくなさそうだった。それでも無言は気まずいので彼は独り言のような感想を漏

らした。

「信じてなかったんですね」

彼女は少し残念そうに呟く。

「それにしてもあのジェイが手も足も出ないなんて。君の実力は世界一じゃないか？」

「いえ、ただ運が良かっただけです。私には最高の機体と最高のパートナーがいただけですから」

彼女の眼差しは真剣だったが、タカオはそれを謙遜と受け取った。

「なるほど。しかしこの二日間の記録を見るけど君の操縦技術は洗練されている。そうだね……ちやうど五年前の選手の走りに似ているよ」

タカオはこめかみに指を当てて記憶を探る。

「そうだ、カーンという選手の走りに似ているね。ランサーのグランプリが始まった第一回から三連覇した選手だ。あの緩急の鋭い駆け引きは魔術師だったよ」

「ずいぶん古い選手のことを覚えているんですね」

彼女は幾分か醒めた表情で彼を見つめた。

「あ、すまない。ひとりで熱くなつてたね」

しばらく沈黙が流れる。

「彼はその機体と共に『白いハイエナ』と呼ばれていた」  
今度は彼女が口を開く。その声にはいくらか憐みが混じっている。

「彼のスタイルは序盤から中盤まで三位を死守するスタイル。終盤にラストスパートをかけて争っていた前のふたりを抜き去り、一位を掠め取る。狡猾さと合理性、何より三位を死守できる堅い走りが特徴ですね。でも今の情勢だとそれは通じない」

「確かにジェイにそんな手は通用しない」

直接対決したことはないが、前回の試合を見ると

彼の体力は底無しに見える。システムサポートが貧弱でもそれを補って余りあるポテンシャルをもっている。

「ジェイ選手がへたるところを想像できないね」

彼女はうなずく。

「だから彼の苦手なところをつく必要がありました。彼のシステム面をです」

確かに初日の彼の機体の動きはおかしかった。システムが正常に作動していればバウンドしたり、いきなり横転するはずもない。

「それは……妨害した、ってことかい？」

確かに過去にもジャミング装置を積んだ機体があった。大会規約的には『何でもあり』なのでもちろんこれも許された。しかし、限られたスペースをその装置のために割くということは推進装置などを犠牲にすることを意味する。

「さあ、それはどうでしょうか」

彼女は悪戯に微笑んだ。あたらずとも遠からず、というところか。

「でもそれですと、速さが足りないと思いますよ」

「そうだ。いちばんのネックはそこだよ」

システム面はどんなに考えてもわからない。チェシーならわかるだろうか。彼は心の中で呟いた。

「あなたのサポートが私よりも優秀でしたら対策を立てられるでしょうね」

彼女は彼の心を見抜いたかのように言った。幾分か挑発的な態度だ。

「カラクリがわかればなんとかなるだろうけど」

「それがわかる前にあなたは死ぬでしょう」

彼女はこともなげに言い放った。まるで結果がわかっているかのよう。

「それは勘かい？それとも預言かな」

その瞳はタカオを真つ直ぐ射抜いていた。鷹色の瞳が鷹のように彼を見ていた。彼は金縛りにあったかのように視線をはずせない。いいえ、近い未来起こる必然です。その言葉は空气中に質量を持って存在していた。

彼女はコーヒーに口をつける。タカオは恐る恐る自分のグラスの中身を喉に流し込む。砂を飲んでるようだった。

「つまり君は俺を殺す、と」

チェシーに言われたことを彼女に返す。それはタカオ自身の疑問でもあった。彼女はため息をついた。

「そういうことです。あなたはそのうち私に追いつくことでしょう。しかしあなたではアズールでは私の前に出ることはできません」

彼女の死刑宣告ははつきりと聞こえた。タカオは引きつった笑みで

「まさか昨日あったばかりの人にそんな刺激的な言葉をもらうなんて思っても見なかったよ。やっぱりこころへんは物騒だ」

と返すことが精一杯だった。

「私は誰かを殺してでもチャンピオンを目指さなければならぬ。そう誓ったのです」

そう言った彼女の視線はもうすでに彼を通り過ぎていく。

閉店だからと二人は店を追い出された。深夜にもかかわらず車の往来は未だ激しく、あちこちの屋台が明かりを灯している。

「あの、奢って下さってありがとうございました」

彼女が深々と頭を下げる。

「あ、いやいや。こんな遅くまで付き合ってもらったわ

けだし。それにいろいろ話せてまあ……よかったよ」

会話は楽しいものではなかったが、参考になりそうだった。彼はそう自分に言い聞かせた。

タオとはホテルの前で別れた。彼女はピットに戻って明日に向けた作業をしなければならぬらしい。彼がチ

エルシーの部屋を覗くと、彼女はシートもかけずに熟睡していた。頬にうつつすらと涙の跡が残っていた。どうやら今日のレースのことで彼女に負担をかけてしまったらしい。彼はそつとシートを肩までかけてやった。

ピットの中は昨日以上に空気が重かった。一言も交わさず進むチェックはいつも以上に早く終わった。平原エリアを抜けると島嶼エリア、そして氷雪エリアへと続く。島嶼エリアは道が寸断されており、一定以上の速度を保ち滑空しなければ海に落ちてしまう。観客にはスリルを与え、ドライバーにはいつも以上に精神的な苦痛を与える地獄のようなエリアだ。アズールには滑空時の走行を安定させる為に変翼を取り付けた。その外見は槍というより鳥だ。

「チェシー」

彼女の後ろ姿に声をかける。肩がピクリと跳ねる。

「今回の賞金を全部遺族に渡すことにしようと思っ」

彼女は振り返った。驚いた表情を見せていた。悪くない反応だ。

「そんなことしたら……生活できなくなっちゃうけど、いいのー？」

確かにランサーに乗り始めてから一年ほどだろうか。貯金は十分とは言えない。しかし節約すれば一年はもつはずだ。

「貯金を崩せばなんとかなる。仕事だってランサーに乗りながらできることはあるはずだよ。スポンサーの社長



にも声をかけてもらっているからなんとかなるよ」

あまりにも淡い期待だったが、それでも未来を信じないわけにはいかなかった。

「それって私も頭数に入ってるのー？」

「もちろん」

なぜそんなことを聞くのか、という反応となぜ当然のことのように考えたのか、という反応。しばらく二人とも首を傾げていたが、

「わかったー。タカちゃんがそれでいいなら私は賛成だよー」

彼女はニコリと笑った。タカオもつられて笑う。

「あともう一つ」

彼はアズールに乗り込む前に彼女にしっかりと向き合う。その瞳は少し震えていたが、同時に期待を含んでいるようにも見えた。

「俺は二度とランサーで撃墜をしない。君に誓う。俺は二度と人殺しをしない」

声はなかったが、しっかりとした頷きが返ってくる。

「もし破ったときは俺はアズールを降りる。代わりにパイロットを探してランサー乗りをやめる」

「違っよー」

意外にも不満そうな声が上がった。

「なんだよ。どこが違う？」

彼女は頬を膨らませている。かつてないほどの大きさだ。

「私も一緒に連れてって」

いやちよつと待て。言葉を続けようとしたが、それを

彼女の差し指が押し留めた。

「タカちゃんは私を連れ出したんだから最後まで責任を持つてよー」

その仕草に胸が高鳴る。彼女もまた気恥ずかしそうにすぐに俯いた。

「わかった。チェシーもついてきてくれ」

死ぬまでついてきてくれ。彼は心の中で呟く。

出走位置に降ろされると前方に白い機体が見えた。やや旧式だが平均的なスピードが出るランサーだ。徹底的な軽量化を施しているのが見て取れる。

「チェシー見えるか？」

『バッチリ見えるよー』

モニター越しにピットにも機体が映し出される。よく『のぞみ』と呼ばれるあの機体の攻略には彼女の協力が不可欠だ。

『2020年、十年くらい前の機体だねー。なんであんなに速さが出るのかなー』

彼女は不思議がっているが、タカオにはなんとなく直感めいたものが走った。機体についている番号は製造年を表している。十二年前、それはカーンが最後にレースに出走した年だ。

「チェシー、あの機体と勝負の時はデータ収集も頼む」

機体に仕掛けがあるわけではなさそう。あのチューニングではアズールよりも少し遅いくらいだろうか。直線で一気にくくことは可能だ。しかしジェイ選手は加速しても前に出ることができなかった。それに加えてシステムへの妨害の可能性もある。

やはりその正体を知るにはあの機体に近づく。それしかないだろう

『タカちゃん、生きて戻ってきてねー』

十二機というタオの撃墜数を見ていたからか、チェシーの不安そうな声が聞こえる。それを聞いて彼は微かに

笑った。昨日まではただ一位を目指した。今まで走っても見えてこなかったものを見たかった。だが今はそれだけではない。自分に課した償い、チェルシーとの約束。イグニッションキーを差し込む。

『タカちゃん、レディー？』

「レディ。アズール、始動！」

蒼槍は翼を震わせて唸る。

「さあ、ランサーズグランプリ2054もとうとう折り返し地点！ 三日目のスタートが切って落とされたあ！ 今回も爆速爆音≡ことへラスがお送りするぞ！ 大河と草原におさらばして見えてくるのは途切れた道でジャンプ！ 群島エリアだ！ 緩やかな坂になっている道を受け登って大空へ羽ばたけ！ おおっと、コースアウトには気をつけなよ！ そのあとは今の氷雪地獄だ！ シベリアとアラスカの雪吹雪は恐ろしいぞ！ みんなも遭難には気をつけような！」

≡が観客を沸かせている間、ランサーたちの順位が入れ替わる。群島エリアはコースから外れる走者が他のエリアに比べて多いのだ。そんな中、タカオは二位の選手に追いつき、その差を徐々に詰めていた。前を走行する緑の槍は前に出させまいとアズールの進路を妨害する。タカオもすぐに途切れる不安定なコースによって決定的な瞬間を作り出せない状況となっていた。

「チェシー、なんとかならないか？」

『うーん、やっぱり群島エリアは難しいよー』

ゴールまでこのままだろうか。嫌な予感が彼の頭を過ぎる。彼女に追いつかなければ。初日に彼女が呟いたもの、見えないものが見える。それが一位の風景であるならば彼女に追いつかなければ。

タカオは考えた。そして彼女に頼ることにした。  
「チェシー。これからアズールはありえない方向を向く。飛行機の操縦をするつもりでサポートしてくれ」  
『いくらなんでも無茶すぎだよ』

道が途切れる。その一瞬、タカオは横に操縦桿を倒し、機体の上部の噴射孔からジェット噴射を行う。右に傾いた機体は左へ流れ、コース脇のバリアの一部を掠め、空中へ放り出される。

『「飛べー！」』

青い青い海と空を背景に彼は空中を舞った。一瞬のことだったが、そこにいたのは槍ではなく燕だった。アズールはその先のコースの右脇に着地した。緑のランサーはその後ろにいた。

「よっしゃあ！」

『「すごい、すごいよータカちゃん！」』

海の色が深い青から黒へと変わっていく。雪の降りしきる氷雪地帯はもうすぐそこだ。タカオは珍しく過去のことを思い出した。

適性があるからといってそれが好きだとは限らない。

その少年はよく学校を抜け出しているなあまり場を渡り歩いていて。中でも非合法の賭場は彼のお気に入り場所だった。賭場には彼の素性を知るものはいない。そのことも彼に開放感を与えていたのだろう。

そんな彼がいつもの賭場でブラックジャックに興じていると、隣に男が座った。

「よお、タカオ。今日も派手にやっとなるな！」

彼は無遠慮に声をかけてくる。タカオは彼のいつもの様子に苦笑する。初めは苦手だったが、今では近況を話し合うほどには仲がいい。

「やあ、相変わらずだねリュウさん。今日はいつもまして機嫌が良さそうだけど、何かあった？」  
心なしかお酒の匂いもする。  
「今日はな、分の良い賭けでがっぽり儲けたのさ」  
「はは、リュウさんまた何かつかまされたんじゃないの？」

分のいい賭けなんてあるはずがない。賭けとはディーラーが儲けるために仕掛けるものだ。  
「このアホ。ワシはこの道五十年で食ってきた男だぞ。」

世の仲のあらゆる遊びを知っとる」

彼がいうには一昔前のフォーレースを模したものだという。しかし速度はそれより早く、そして機体同士のぶつかり合いや破壊行為など残虐性もある。レースは明日もあるらしくせつかなのでタカオはその賭けに参加することにした。

レース当日は雪が降っていない日だった。冬のシベリア地域ではかなり珍しいことだった。それが理由なのか、レース会場はかなりの熱気に包まれていた。

「おーい、タカオ！ こっちだ」

リュウさんが手を振っているところは席の上の方だった。会場がよく見えるいい場所だった。

「昨日調べたけどすごい速いんだろ？ そんなの見たも勝負なんてわかるのか？」

レースにもよるが、『グランプリ』と呼ばれる最大のレースでは時速三千キロを超える音速のマシンが地球を一周するレースをするらしい。

「確かに速いが、今日のは時速一千キロ級のアマチュアレベルのレースだ。心配すんな。モニターがちゃんとそれを追ってくれるから置いてけぼりになることはないさ。それよりも賭けの話だ。いいか、レースに勝つマシンは

大体の目星がつく。一番速いやつだ」  
「はあ」

それはそうだろう。呆れた表情をするタカオを尻目にリュウはウキウキとした表情でレースの瞬間を待つ。周りの大人たちも嬉々とした表情で会話している。何組か喧嘩している人たちもいたが、総じてカジノより民度が低い。

「なあ、リュウさん。レースはまだか？」

「あともうちよつとき。ほら、マシンがきたぞ！」

いくつか写真を見たが、ラインに並んだランサーは小さく見えた。こんなものが本場に陸上最速の乗り物だとは思えなかった。しかし、そのデザインは確かにかっこいい、タカオは心の中で幾分か見下したような感想を漏らした。しかしその余裕はスタートと同時に崩れ去る。

「何が起こった？」

一瞬にして黒い影と化した機体。空気を裂き、耳をつんざくような音だけが会場の、タカオの身を包む。

「ほれ、ちゃんとモニターをみる」

リュウに言われた通り、ランサーに追隨しているカメラから送られてくる映像に目を落とす。ランサーたちは全てを遙か彼方に置いて走っていた。自分たちがいる会場も、雪に覆われたシベリアのタイガも、荒波がぶつかる岩壁が連なる海岸も。すべてを漫画のコマ送りのように置き去りにして走っていた。

「なんだよ、これ」

入場の際に配られたパッドの画面を切り替える。ドライバーの見る景色ははつきりとしたものの形など写っていないかった。すべてが一瞬に過ぎ去る。

「なあ、リュウさん。こんなの見たことないぜ」

「ん？ ああ、どうだ。楽しいだろ？」

タカオは無我夢中でモニターの画面を見た。自分が今まで見てきたものはすべて嘘なのではないか。そう思えるほど画面の中の風景は鮮やかに移ろい、過ぎ去る。

それが彼の心に焼き付くまで数分と掛からなかった。「ここまでできたぜ。なあチェシー、故郷に戻ってきたぜ」「うん……」

彼女は何を思っているだろうか。もしかしたらかつていた場所に置いてきたものがあるのかもしれない。蒼い鳥はゴールラインを超えた。

ジェイは苛立っていた。自分に見合った力量のサポートがない。

「くそッ！」

苛立ちのままに拳が振るわれ、サンドバッグを吊るしていた鎖が弾け飛ぶ。レースは最後になるまでわからない。しかし今のままでは前回の栄光を取り戻すことができるとは思えなかった。数年来のサポートが急逝してしまつて以降、彼は思うように走れていない。外見から誤解されがちだが、通常より多くのコアコを利用するためサポートには繊細な計算とセンスが要求される。グランプリの直前の試合では一位だったものの、二位との差は一秒足らずだった。

「あいつが生きていてくれれば……」

手持ちデバイスのロック画面を見る。そこには自分と肩を組んで笑っている男がいた。

「ユスフ、なぜ死んだんだ」

画面がばやける。彼はそつと目元を拭いた。その時、部屋の扉を誰かがノックする。

「誰だ」

『私だ。入っていいか』

自分の雇主の声だった。扉のロックを開けるとそこには初老の禿頭の男がいた。

「調子は……よくなさそうだな。派遣したエンジニアはことごとく君の気に入らなかつたようだ」

口角を歪ませて男は鋭い視線をジェイに向けた。

「パイロットに力を発揮して欲しければそれに見合った力量のエンジニアを寄越せ」

彼も負けじと男を睨む。アレクサンドル・メイヤー。

彼はいくつかの顔を持つ。国家企業であるZSアメリカ企業共同体のプロダクト部門を統括する取締役であり、プロダクト部門の目玉であるランサーズプロジェクトの責任者でもある。そして元アメリカ陸軍所属の中将であり、ZSの長官でもあった。

「いいだろう。見かけによらず繊細な君と君のランサーのために最高級の人材を用意しておいた。有効に使ってくれたまえ」

入りたまえ。彼の声に続いて現れたのはすらつとした美しい女性だった。ジェイは当惑したように彼女を見つめていたが、ため息をついた。

「アレク。なんの冗談だ。青二才の次は女か。私の仕事場に女性は似合わない」

彼は二人を交互に見てベッドに腰掛ける。

「もつとも、彼女が軍人であるならば話は別だが」

アレクサンドルはなぜか口元を歪ませたままた。女性はメガネのブリッジを押し上げる。その奥の目はゆつくりとジェイを観察している。

「ハンナ。自己紹介をしてやれ」

彼女は不動の姿勢で右腕をあげた。手はこめかみあたりに素早く位置する。

ZSアメリカ傘下のニューヨーク警備所属、新アメリカ

大陸軍准尉のハンナ・ドックスです。本日よりシステムサポートとしてプロジェクトに参加いたします」

少女は薄暗いピットの中にいた。彼女の目の前にはピットの壁に立てかけられた白いスクリーン。画面いっぱい白い乗り物が動いていた。

「お父さん頑張れー！」

少女は画面に向かって大声を張り上げる。

『おう、任せとけ！ ガン爺、飛ばすぞ！』

少女の歓声はパイロットに届いており彼はそれに答える。ピットの隅のブースから老いた男が顔を覗かせる。

「よしてきた！ のるか反るかだ、システム防御も全部推進系と機体制御に限界までぶち込むぞ！ 相手のケツを叩いてやれ！」

少女に聞かせる言葉ではないが、無線からも『やつてやらあ！』と元気な返事が返ってくる。それが彼女に残るレーサーとしての父の記憶だった。

彼の父親、カーン・フラクターは常に三位から一位へと逆転を演出することで有名な選手だった。その一種の劇とも言える鮮やかさは観客を喜ばせたが、他のランサー乗りには悪印象を与えていた。当時のランサーのパイロットの間では一種の騎士道精神が重んじられていた。勝負は常に一対一で行われるものであり、常に先を目指して走らなければならない、とされていた。しかしカーンはそのどちらも守っていないかった。あくまでも勝利のために他の選手を先行させ、争わせる。そして自身は三位の位置から二人を出し抜くタイミングを図るのだ。しかし彼には数々のグランプリやチャンピオンシップで一位を取り続けてきた確固たる業績があった。

彼は自身の走りに魅せられた若者を集めて企業を作つ

た。どの企業連合にも属さないランサーたちのための企業だった。今はもうない。カーンがランサーの業界から引き摺り下ろされたのと同様の運命を辿ったのだ。当時の彼の企業にいたあるエンジニアが企業連合のひとつに引き抜かれ、その際に内部の情報を持っていったことが事的一端であった。誰もランサー事業に頼りっきりの不安定な彼の企業にとどまることなく、次々と巨大で安定した企業連合になびいていった。それぞれ企業機密とともに。そしてカーンは失意のうちにレース中の事故で亡くなった。給料を払えない彼のピットに新品の部品を届ける営業マンも、修繕を行う整備士も残っていなかったのだ。

「ミシヤ。そろそろ出番だ」

しわがれた男の音がする。彼女は閉じていたまぶたを開ける。瞑想はもう十分だろう。真っ白の心のままヘルメットをかぶる。

「ガン爺。今日もよろしくお願いします」

「おう、ミシヤも気をつけて行ってこい。機体は万全に直しておいたぜ」

白いランサーに乗り込む。

「ガン爺、ヘルメットをつけたときは“タオ”って読んで頂戴」

男は苦笑いで、すまん、とだけ言った。ピットから運び出され、出走位置に運ばれる途中、彼女はずっと操縦席の上に貼られた写真を眺めていた。そこには幼い頃の自分十歳だったと思うとガン爺。そして今は亡き父の、カーンの姿がある。自分は父に肩車をしてもらっている。

「父さん、私頑張るから」

彼女は淡く微笑んでシートに座り直す。コースに降り

立った機体とともに彼女は前を向く。イグニッションキーを差し込む。

『タオ、準備はいいか？』

「オーケー。システム“道”、始動！」

レース四日目が開催された。目の前に広がる雪原は自身の殻に閉じこもった老人という表現がぴったりだ。

『いよいよだねー。タカちゃん大丈夫？ 寒くないー？ 暖房装置入れてないけどやっぱりあった方が良かったかなー』

緊張しているのかチェシーは口数がいつもより多い。落ち着きもない。ライダーズーツには保温機能が完備されている。ピットの方がよっぽど寒そうだが、と彼は思った。

「うるせえよ。お母さんか」

『あー！ またそれ言ったー！ 違うよ、心配なだけだよー！』

彼女はしばらく文句を言っていたが、何も言わないタカオに屈したのか口数を少なくしていった。目の前に広がる雪原の中に白いランサーが佇んでいる。まるで雪鬼のようだ。しかしそのウサギは強靱な後ろ足を持っている。ライオンをはじめ返すほどの強力なものだ。

「まあ、俺の幸運を祈ってくれ、チェシー」

『そうするよー』

目の前のウサギは易々と幸運の足を渡してはくれなさそうだから。彼はひとり心の中で毒づく。

レースが始まる。雪の降り積もった道を電動のガイドマーカーを頼りに走る。まるで獲物を追う犬になった気分だ。白いウサギは尻尾を見せているが、その姿を全て見ることは叶わない。

『タカちゃん、タオとの距離はどのくらいかなー？』  
チェシーから突然不思議な通信が入った。アズールには昨日のレースから続けて赤外線カメラを取り付けている。

「相対速度八百キロ時で二十五秒だから、およそ六キロだな」

適当な計算を彼女に伝えると黙り込んでしまった。

『ごめん。適当に言った。ちゃんと計算する』

『いや、タカちゃんは運転に集中しててー』

しばらく彼女は意味もなく唸っていた。

「おい、チェシー。もうちょっとで一キロ切るぞ」  
そうタカオが言った瞬間だった。機体が急激に振動した。

「チェシー、アズールがおかしい！」

必死に操縦桿を握りしめる。

『タカちゃん、スピード落とせ！』

タオの白いランサーと距離を取る。振動は治った。

「一体何が起きたんだ？」

急激に機体が不安定になった。これは機体の整備不良だろうか？

「システム妨害か？」

『それはないよー。今ログも調べてるけど姿勢制御も周波数同調システムも通常に動いている見たいだねー』  
しばらく様子見をするしかなさそう。

手に汗がにじむ。機体の制御が不調なのか、振動が治っては激しくなる、と安定しない。

『ごめんよー、タカちゃん。周波数は合ってるのに、何かに引っ張られているのよー』

キーボードの連打がかってないほど連なって聞こえる。かなりの負荷がかかっているようだ。しかしタカオも機

体の操縦がいつもより困難であることに気がついていた。「こちらも何かに流されているような感じがする。タオと距離を取るのもやっとだ」

前を進むタオのランサーの動きも妙だ。不規則にジグザグ走行をしている。視界に映る路面も心なしか歪んで見える瞬間がある。気のせいだろうか？ 目を擦り、ふと赤外線カメラの映像をみるとそこでも彼女のランサーが歪んで見えた。フレームの端が地面に吸い込まれているように見える。

「なあ、チェシー。赤外線カメラ壊れてないか？」

『あー、タカちゃん気づいた？ 映像がバグってるのかなー。帰ってきたら見させてー』

データはこれで十分だろうか？

「チェシー。これ以上タオに近づくのは危険と判断した。距離をとって対策を立てよう」

彼は何もわかっていないが、原因の究明は彼女に任せることにした。そしてエンジンの出力を落とそうとした瞬間、前に引つ張られる力が強くなった。

「どうなってやがる！ 速度が落ちない！」

『タカちゃん、推進装置切ってみてー！』

ジェットパックへの燃料の供給を止める。しかし、アズールは依然として前進していた。逆噴射を加えても同じだった。機体の向きが左右に揺れる。

「くそっ！ 何かに引きずられてる！」

タオと同じように不規則にジグザグの進路を取り始める。操縦桿を横に倒すが、全く反応しない。

『周波数の針路が無茶苦茶だよー。再設定の演算が間に合わない！』

「可変翼展開！ 逆噴射と空気抵抗で止めるぞ！」

アズールの底部に収納されている翼が突き出る。翼は

すぐに空気を受け、速度を下げる。蒼燕はバランスを崩し、横に回転する。底部が道に擦れ、衝撃と金属音。視界の端に火花が派手に散る。

「止まった……」

『タカちゃん！ 後続がきてる！』

タカオはイグニッションキーを再度差し込み、アズールを始動する。後続はあの赤い巨大な機体だ。赤い騎士王、赤い巨人。パイロットたちに様々な異名で恐れられているランサーが後ろにいた。

「追いつかれた！ チェシー、機体制御はなんとかあったか？」

『……』

彼女からの返事が返ってこない。

「おい、チェシー？」

インカムから『ブツン』という音が聞こえ、すぐに無線が繋ぎ直される。繋ぎ直される？

「おい、誰だ？ チェシーじゃないな」

『この音声は録音だ。繰り返す。この音声は録音だ』

女性の音声が聞こえる。意思の強そうな、硬い音声だ。

タカオはしばらく操縦桿を動かしていたが、アズールはどういうわけか全く言うことを聞かない。

『貴官のランサーは只今より我がイージスシステムの制御下にある。貴官はランスロット号の指揮下に入ってもらう』

ランスロット号。聞いたことのある名前だ。

『艦長はジェイ・パトリオットが務める』

彼が『騎士王』と渾名される所以だ。本当は王を裏切った者の名前であるのを知っている者は少ないが。タカオが声を聞いていると頭上から金属同士がぶつかる音が聞こえた。上にあの巨大なランサーが覆いかぶさっているように見える。どういうわけか彼のランサーを支えているらしかった。横にも似たようにランスロットを支えている他のランサーが見えた。いくつもの槍を揃えてあの謎の機体に挑む。それが彼の戦略らしい。

「チェシー！ おいチェシー聞こえるか？」

無線の周波数を変えたり出力を変えて通信を試みるが、全く反応がない。操縦桿を倒してみても彼の機体は全く動かない。何分立つたのだろうか。突然アズールが振動する。前を見ると白いランサーが近づいていた。どうやらあの謎の力で機体が不安定になっているようだ。横を見るとひとつ、またひとつとランサーたちが制御を離れてコース脇のバリアに衝突する。

「冗談じゃない。ジェイのために使い捨てにされるだけ？ これじゃ奴隷だ」

タカオはイグニッションキーを抜き差しした。燃料供給レバーを目一杯上げ、緊急停止用のボタンを押す。それでもダメだった。

「最後まで足掻いてやる」

タカオはシートのカバーを開け、小さなドライバーを取り出す。イグニッションキーを指しているカバーを取り外し、コードをたぐる。反重力装置と推進装置どちらかに電力を供給しているバッテリーはシステムを動かすコアコンピュータにもつながっている。コアコンピュータはイグニッションキーによって起動し、停止する。先ほどのキーの挙動に反応しなかったということはコンピュータは独立して動いているということだ。つまり、

「後でチェシーに怒られるなあ」

コンピュータを破壊すればいい。コンピュータを破壊しても反重力装置と推進装置は電気が通れば動く。その場合は視認によって地面との距離を測りながら走行しな

ければならない。それでも彼はやるしかなかった。ここで死ぬわけにはいかない。

「チェシー、本当にごめん！」

コードの先、基板らしきものにドライバーを突き立てる。激しい火花が散り、目の前が何も見えなくなる。しかし振り回されていることだけはわかる。コンピュータ制御を失ったアズールがランスロットから切り離されたのだ。自身の三半規管の感覚だけを頼りに操縦桿を操る。推進装置、反重力装置への燃料供給を止める。そして蒼き燕は片翼を失いながらも腹を地面に擦り付けて止まる。幸いにもバリアに衝突して分散することなく停止した。

彼は徐々に戻ってくる視界で周囲を見渡す。あたりに裏切りの騎士に使い捨てられた槍がみるも無残に打ち捨てられている。彼は近年まれにみる騎士道精神の持ち主だった。首位の選手に対して挑む様は正しく騎士そのものだった。他のランサーの進路を妨害することもなかった。彼には彼なりの矜持があるらしかった。何が彼を変えたのか。

ピットに戻ったのはそれから数時間後だった。簡易的な針路補助を行うゴーグルをつけたおかげで肉眼でコースを走り回るのは避けることができた。もしそうする羽目になれば明日のレースが終わっても辿り着けなかっただろう。

「タカちゃん！」

「おお、タカオ！」

中に入り、操縦席から這い出るとチェルシーと社長がいた。社長は嬉しそうだった。チェルシーは泣きそうな顔をしていた。

「二人とも、ただいま。顔が見られてよかったぜ」  
彼は床に崩れ落ちるように座る。チェルシーが飲み物を手渡してくれた。

「大丈夫？」

タカオはうなずき、うなずいた。言葉がなかなか出てこない

「いや、それよりチェシーは？ 指を痛めているみたいだな」

彼は肩に置かれた彼女の指を見る。小さくカットされた湿布が指に、関節には血の滲んだ絆創膏が貼られている。

「タカオ、こっちは大変だったぞ」

社長が言うには、通信が取れなくなつてからチェルシーはざつと黙りこくつてキーボードを叩いていたらしい。社長が呼びかけてもしばらく何も反応しなかったそうだ。

「私は大丈夫。タカちゃんは最後まで頑張つて」

彼女は慌てて手を隠す。その一瞬だけいつもの豊かな表情はなかった。

タカオは彼女に経緯を説明した。タオと距離を取ろうとしても引つ張られたこと。その後ジェイのサポートらしき者によってシステムを乗っ取られたこと。脱出するためにコンピュータを破壊したこと。

「タカちゃん……」

怒られる、と思つて身構える彼を彼女は抱きしめる。なぜか頭まで撫で始めた

「タカちゃんバカなのに頑張つたねー！ ほんとによくやったよー」

褒められているのか貶されているのかよくわからなかったが、彼女が喜んでいいるならそれでよかった。

「すまん、壊して」

「いいのー。どうせ取り替えなきゃー、つておもつたしー」

「二人とも、そのコンピュータはウチから出す」

今まで彼の話を黙つて聞いていた社長が口を開く。彼はいつになく優しいような表情をしていた。

「社長もすまない。せつかく二位まで上がったのに今じゃ最下位だ」

「いいんだよ。お前のミスでそんな状況になつたわけじゃないだろ。それに」

彼はニヤリと笑つた。

「ちゃんと巻き返すんだろ？」

タカオも右の口角を上げて笑みを返す。

「もちろんだ。チェシーも一緒に手伝つてくれるか？」

彼女は返事をせず立ち上がる。悲しそうな表情だった。

「手伝いたいよー。けど今の私じゃ力不足なのー」

だから、と彼女は呟いた。昔の自分に戻る、と。顔から表情が消え失せる。タカオは何かに気がついて彼女を睨みつける。

「おい、チェシー。やめる」

「……」

彼女は何も答えない。

「夢が叶つた、つて言つてたじやないか。それを自分から捨てるなんて」

「今度はあなたの番」

「え？」

彼女は、チェルシーは人形のような目で彼を見つめていた。

「あなたにありがとうも、ごめんなさいも言えた。普通の女の子になれた。私は自分の感情くらい切り捨てたほ

うがあなたの役に立てることをわかってる。だからこんなもの」

「違っぞ」

彼は彼女の瞳を見つめる。その奥にはまだ生命の光が残っている。

「感情を捨てたらダメだ。俺はそんなこと望んじやない。望んでしまったら何度だってそうするだろ。だからやめてくれ」

タカオは立ち上がり、彼女に語りかける。

「タカ……ちゃん？」

「チェシーは感情がなかったんじゃない。ただそれを表現するのが苦手だっただけだ」

彼女の胸に手を当てる。柔らかさの奥に鼓動と温かさを感じる。そうだ。彼女は人形なんかじゃない。

「お前は元から普通の女の子だったじゃないか。俺はずっとお前のことが好きだったぞ」

「本当に？」

彼女はその身を震わせる。

「ああ。もちろん」

タカオはしつかりとうなずき、肯定する。

「この感情、初めて」

心臓が脈打つのははつきりと感じる。掌から伝わる温かさは彼にも伝わった。

「これが一番大切な感情なんだね」

彼の手を彼女は包み込む。彼女の目に、表情に生気が戻る。咳払いがピットに響き渡った。

「お二人とも熱々なところ悪いが来客だ」

チェルシーは小さく悲鳴を上げてタカオから離れる。

かぶっているベレー帽と同じくらい耳まで真っ赤にしている。

「社長、そりゃないぜ」

タカオはわざと残念そうな表情を作ってピットの出入り口のドアを開ける。

「はいはい、誰ですか……っつと」

そこにいたのはピンクのライダースーツが目を引く女性と帽子を目深に被った老いた男がいた。

中に入ってようやくタオはヘルメットを脱いだ。ガン

爺と彼女に呼ばれた男も年代物のゴーグルと帽子を脱ぐ。豊かな白い髭に似合った厳しい表情をしている。

「小僧、うちのミシヤが世話になった」

「は？ ミシヤ？」

私の名前です、とタオ。本名らしい。

「まさか生きて帰ってくるとは思いませんでした」

彼女は呆れ顔でタカオに言った。チェルシーはいつの間かタカオの横に来ていた。

「何の話？」

「昨日ちよつとな」

「彼に夜遅くまでお付き合いいただきました」

「うわ、誤解を招きそうな表現だなあ」

「タカちゃん最低！このバカ！」

チェルシーはタカオの背中を強く引つ叩いてパソコンを置いてあるブースに閉じこもってしまった。

「ごめんなさい、あなたにべつたりな彼女に意地悪をしなくなりまして」

悪びれた様子もなく彼女は小さく舌を出した。

「勘弁してくれ。後で彼女に殺される」

とタカオは苦笑いで返した。

ピットはそれなりに広いはずだが、どこか居心地悪い雰囲気満ちている。

「さて、私と勝負して生き残ったのはジェイとあなただけです。まずはおめでとうございます、と言わせてください」

何かをしたわけでもないのに褒められるのは些か妙な気がしたが、タカオは「ありがとう」と彼女の賞賛を受け取る。

「さて、ここに来たのは私の目的を話すことです」

「それはオレも聞いていい話か？」

すぐ横で社長が口を挟む。彼女はうなずいた。

「かつてカーンは『エヴォリユーション』という企業を立ち上げました。彼がグランプリを制して三年間活動していた独立系の企業です」

タカオは記憶の中からその名前を引つ張り出した。昨日カーンの名前が出てきたからか、易々と思いついた。

「ああ、エヴォリユーションの選手はかなり強かった、って聞いたことあるな。三年間でカーンの他に三名のリーダーを輩出した、だっけか？」

「ミシヤはうなずいた。確か名前はオリハ、ワジヤナリ、そして」

「ジェイ。ジェイ・パトリオットよ」

そうだ。前大会のチャンピオン出身が大企業ではなく、今はなき独立系の企業だったことでマスコミを賑わせていたことを覚えている。

「それで、彼に個人的な恨みがある、と」

「ええ。彼がカーンの、いいえ。父の企業から情報を持ち出してのアメリカに持っていったことがエヴォリユーションの崩壊の始まりだった。彼はアメリカ陸軍の大佐であり、NSAに所属していた。そして彼はとある任

務によりあの企業に潜入していたの」

「それは君が襲われていたことにも関係がありそうだ」

しかし彼女が企業機密を握っているとでもいうのか？  
カーンが活躍していたのは十年ほど前だ。その時、彼女は子供のはずだ。

「最後のレースに出る前に私は父から小さなキューブをもらったの。それには彼が一生を費やしてガン爺とその他の様々な人たちと作り上げた理論が暗号化されて入っていた。私は新しいパズルだと思ってそれを頑張つて解いた。そして今のあの機体が作られた」

「待って待って、いろいろ詰め込みすぎて頭がパンクしちゃうだ。カーンが何か大層な研究をして、ジェイが君の父親の企業から情報を持って行って、けど実際はその情報は君に託されていて、君がその理論を実現させた、と？」

彼女はうなずく。

「御大層な陰謀なことだ」

大企業に狙われる一般市民？ そんな話は昔の国家があつた頃の話ではないのか？

「企業がそんなことをしてもメリットがないだろう。それに君が抱えている理論はそんなに秘密にしておかなければならないのか？」

その時、ブースの扉が勢いよく開かれた。

「当然だよ、タカちゃん」

チェルシーは珍しく焦っていた。

「ようやく解析が終わったんだけどびっくりしちゃったよ」

「何がわかったんだ、チェシー」

彼女の手にはアズールに取り付けられていた赤外線カメラが握られていた。

「周波数が乱れたり、赤外線カメラの映像がおかしかったりした理由。タカちゃんも変な物見なかった？」

確かにあの時視界が歪んでいた気がする。

「あれはねー、特異点がいくつも出現していたのー」  
「とくいてん？」

「いわゆるブラックホールってやつだねー」

ブラックホールってあの、なんでも吸い込むやつか。

「いや、何でだよ。地球上でそんなものできるわけないだろ」

「それができるんだよ。理論上は『カーブラックホール』っていう小さな特異点を作る技術が存在するのー。いやあすごいねー。物理学はよくわかんないけど生きているうちにこんなことに巡り合えるなんてー。ミシヤちゃんが作ったの？」

チェルシーは満面の笑みで彼女の隣に座る。ミシヤは少し引き気味だが気づいていない。

「企業秘密です。あと近いです」

どうやら彼女のいたずら心も真つ直ぐな好奇心の前には歯が立たないらしい。

「その、カーブラックホール、って言うの？ それが一休何に使えんだよ」

社長が会話についていけないことに苛立ちを感じてチェルシーに問いかける。彼女の代わりにミシヤがその問いを引き継ぐ。

「四次元を操る、つまり時間を操ることができるようになる」

「そして？」

「応用すればタイムマシンができる」

タカオと社長が動きを止めた。

「この技術は人の身を危険に晒す。ここで聞いてしまった貴方達も危険に晒されるでしょう」

「立派な脅しだな」

彼女は悲しげに俯く。

「そうですね。そう受け取っていただいて構いません」  
「それで、タオは……ミシヤは何を言いに来たんだ？」  
本題はそこだ。理論の話についていけないタカオはそこだけ聞くことにした。

「私はグランプリの賞金を使って企業を立ち上げます。あなたにはその社員になってもらいたい」

彼女の話はごく単純なものだった。それが彼女を一位に駆り立てる理由。

「なるほど、お父さんの敵討ちか」

「ランサーグランプリの制覇、それが父を殺したランサー業界への復讐です。手始めに一位から三位までを制覇するのです」

「なるほど、そうか。面白いね」

タカオは笑った。声に出して笑った。彼女は呆気に取られた顔をしている。

「そうかそうか。そんなつまらない理由だったとはね」

彼女は未来を見据えてあの層気楼を見ていたわけではないのだった。彼女に塔を見せていたのは心に暗く燃える負の炎だったのだ。

「そうですか。企業に属さないあなたにはわかってもらえらると思つてました。ひとりて走るあなたには何か企業に対して思うところがあるのかと。この子に関連して何か私に似た何かがあるのかと思つてましたよ」

彼女は明らかに落胆している。チェルシーは「私つてそんなに有名？」と首を傾げている。

「いや、俺はただランサーの速さに憧れただけだ。何もかも忘れて、後ろに置き去って走れる最高の体験に心がときめいたただのバカだよ」

ランサーに乗る理由はやはりそれでいい。故郷の雪原を踏みしめて、その空気を切り、走つて思い返したこと



はそれだけだ。それだけでいい。

「残念です」

彼女は席を立った。

雪と風が吹き荒ぶピットの外をミシヤとガンは歩いて行った。チェルシーは名残惜しそうちにその後ろ姿を見送る。

「もうちよつと話したかったな」

「こつちはひやひやしたぞ」

彼女があつさりタオのシステムを暴露したおかげで殺される可能性もあった。

「ふう。助かった……」

「おい、タカオ。オレの誘いを忘れてないだろうな？」

社長も不満そうな声をあげた。確かに彼が先約だ。

「悪いけどやっぱ断らせてもらっていい？」

「ええ……」

彼は露骨に嫌そうな表情をした。

「ただ、パイロット契約は延長させてくれないか」

「まあいいけど。ずっと一位を取って続けるなら」

「無茶言うなあ」

「冗談だつて」

彼は笑いながら言っているが、明日になればさらに無茶を言うかもしれない。

「さて、オレは帰りますかね」

「いや、それはやめたほうがいい」

タカオは社長を引き止めた。ミシヤがピットに出入りしたことでMSアメリカの連中にマークされているだろう。

「あー、やつぱり？ でもなあ……」

どうにも歯切れが悪い。タカオは「な、何ですか」と恐る恐る彼の言葉を促す。

「お前らの大胆さにはおっさん参っちゃう……的な」

チェルシーが無言でタカオの背中を何度も叩く。

すっかり陽が落ちて真夜中。チェルシーとタカオはそれぞれシステムの改変とアズールの修理に没頭していた。社長はもうとっくに一つしかないベッドで寝ている。タカオは引きずり落とししたくなる衝動を抑え、操縦席に寝袋を放り込む。

「チェシー大丈夫かな」

ふと気になってブースを覗く。椅子に座っている彼女は頭に電極を張って目を閉じていた。確か脳の電気信号をコンピュータに送る装置だ。しかし脳にかなりの負荷がかかると言う話を彼は思い出した。

「おい、大丈夫かチェシー」

彼女は目を開ける。すぐ眠たそうだ。

「うん、大丈夫だよ」

そう言いつつも彼女はすぐに目を閉じる。

「これ外すぞ」

「ダメだよ」

頭に伸ばした腕を彼女が弱々しく掴む。タカオは言葉を重ねようとしたが、彼女の瞳は力強く彼を見ている。

「今指が使えないから代わりにこれ使ってるの」

「あとどれくらいだよ？」

十分。彼女はつぶやいた。

「わかった。何か飲み物持ってくる」

「ここにいて」

タカオを引き止める腕にわずかに力が加わる。

『タカちゃん』

モニターのスピーカーから音が流れる。彼女の声だ。

画面には相変わらずスク립トにソースコードが生成され続けている。

『もう一回言つて。あの、さっきの言葉』

彼女が何を欲しているのか。彼は呟く。

「なんだっけな」

『もう』

彼は笑った。彼女もつられる。

「嘘だよ。好きだよ。愛してる」

『本当に？』

「おう、世界で一番好きなものを聞かれてもチェシーって答えるぜ」

『そっか。うん』

彼女はずつと彼の腕を掴んでいた。

いつまでそうしただろうか。画面の文字列に終わりが見えた。どうやらシステム構築は完了したようだ。

「チェシー、終わったぞ」

彼女の腕が離れる。静かな寝息がブース内ではつきりと聞こえる。

「明日起きたら体痛くなるぞ」

よほど疲れたのだろうか。チェルシーはタカオの独り言にも反応することなく眠りに落ちていく。彼はため息をひとつ。ベッドを二つは買って置くべきだった、と後悔した。彼女の肩に着ていたジャケットをかぶせてやる。

「おやすみ、チェシー」

彼はアズールから寝袋を取り出し、ブースの扉の前で蹲って眠りについた。

五日目の朝を迎えた。レース会場の標高が高いせいか、気温が低い。吐いた息が白く見える。

「おはよー、タカちゃん」

コーヒーを入れているとチェルシーが目を擦りながら扉を開けて出てくる。ベレー帽がずり落ちそうだがなん

とか止まっている。

「いやーよく寝た。二人ともおはよう！」

なぜかレースに関係ない社長が一番元気なことにタカオは苛立ちを覚えたが、皮肉を言う元気はレース中にとっておくことにした。

「チェシー、昨日は何を追加してたんだ？」

いつもなら数分で終わるシステムチェックを彼女は夜遅くまで続けていた。何か大掛かりな仕掛けを用意したのだろう。

「知りたい？」

「勿体ぶるなあ。聞かないでおこうか？」

「冗談だよー。ハッキング対策とミシヤちゃんのシステム対策かなー」

「どちらも三時間でやったと言うのか。」

「チェシー、無理しすぎだ」

「感情を半分くらい削れば関数処理に回せるからー。昨日中にやらなければならなかったことだしー」

「このバカ。昨日あれほどやめろ、って言ったのにやっぱり無理して」

「させてよ」

語気を強めて彼女は言った。その目はタカオをまっすぐ見ている。

「私もタカオと一緒に走らせて。私にできることはさせて」

「そうは言ってもなあ」

「ダメって言っても聞かないからねー」

チェルシーはタカオの手からコーヒーをとり、一口飲み込む。

「あつーー！」

「入れたばかりだからそうだろう……」

横目で彼女を見ながら社長にもコップを渡す。

「やれやれ、朝からお熱いことだねえ」

「すみません。レースが終わればなんとかしましょう」

彼は黙ってコップを傾ける。

「こうなったらミシヤだっけ？彼女にも営業かけてレース部門に入れようかね。毒を食らわば皿まで、だ」

「冗談めいた口調で彼は言い放った。」

「そんなことしたら会社乗っ取られますよ」

「はは、冗談じゃねえ。マジでやりそうだから保留にしよう」

社長は乾いた笑い声をあげる。

五日目のコースは険しく長い二つの山脈を縦断する危険な細い道だ。すぐ横は崖。それだけでなく薄い酸素がパイロットの思考判断を鈍らせる。命がけの極限レース

で彼らは何を掴むのか。

『タカちゃん、気をつけてね』

「ああ。チェシーこそ無理するなよ」

交わす言葉はいつもより鮮明に聞こえる。すぐそばにいてくれる。タカオは彼女の存在を今までより強く感じた。

「社長、チェシーの様子を見ておいてください」

『わかった。お前も無理して崖から落ちるなよ』

「俺の腕を信じてくださいよ。じゃあチェシー、いつものよろしく頼むぜ」

不安はない。タカオは自信たっぷり彼女の言葉等待つ。

『タカちゃん、レディー？』

「レディー。アズール、始動！」

レースの幕は切つて落とされた。

長いトンネルを抜けると眩しい日光と同時にまた岩肌が見れる。

「ハンナ。艦隊は完璧か」

ジェイはサポートに無線を飛ばす。

『ただいま九十パーセントです。しかし勝負を仕掛けるにはまだ早いと愚考いたします』

「それだけあれば十分ではないのか？」

彼は一刻も早くこの状況を終わらせたかった。焦りを抑え、彼女に問いかけるが、その返答は至って冷静だった。

『失敗すれば全てが無駄に終わります。私はあなたを走らせることを目的にここにいるわけではありません。あなたに勝利を掴ませるためにここにいます』

その最適解が今の状況だ。彼女は聞く耳を持たない。ジェイは奥歯を噛みしめ、自分の無力を感じた。彼女の考え、導いた答えは確かに合理的だ。しかし彼には致命的に合わない。これまで貫いてきた彼の心に何ひとつ沿っていない。しかし彼に道は残されていない。カーンを裏切つてまで手に入れたチャンピオンの座を維持しなければ彼の生活は保障されない。アレクサンドルの野望を叶えることも、祖国アメリカを再興する夢も遠く。何より初日に受けた屈辱をあの白きランサーに返すこともできない。

「耐えよう。甘んじて受けよう。勝利を掴むことに名誉を捧げよう」

彼はひとりつぶやいた。ちょうどその時、後ろからおいすがる一機の槍が。

「昨日の二位か。懲りずに挑戦するその心意気、受けてたつぞ。ハンナ、時間を稼ぐ。ハッキングしろ」

操縦桿を握る手に力が入る。彼の進路を妨害する。

「昨日のように我が勝利の糧になつてもらおう」

必死に前に出ようとする蒼い槍。しかし細い道にランスロットの巨体という条件が重なり、出し抜くのは絶望的だ。

『ハッキング完了。イージスシステムの制御下におきます』

ゆつくりと最高の騎士の下に傳く最後のランサー。彼のもとに集まった香車は彼の足となり、予備の得物となるのだ。

『イージスシステム、配備完了しました。ジェイ指揮官御命令を』

「よし、いくぞ。純白の猛者に借りを返してやろう」

レバーを押し上げた瞬間、誰かの声 flowed。

『こんにちは、初めまして。チェルシーだよ』

それは無線から流れていた。

「ハンナ。ふざけている場合ではない！」

『違うよ、チェルシーだよ。昨日のお返しをしにきました』

ハンナとの連絡は取れない。彼女の声が不気味に操縦席内に響き渡る。

「昨日の、だど？ 私のサポートが仕掛けた電子戦か」

『そうそう。昨日は対策しなかつたけど今日はバッチリしてきましたー。というわけでえい☆』

金属音が機体下部からいくつも響き、捉えていた槍たちが一斉に走り出す。

『システムを変更しておいたからー。これで平和だねー』

「一体何をされた？」

『……』

彼女からの信号は途絶えた。一体なんだつたのか

『ジェイ指揮官！』

ハンナからの通信が復帰する。

「ハンナか。どうした？」

『申し訳ありません。イージスシステムが乗っ取られて上書きされました。普通の制御システムに戻されました』

「？ 何が良くないのだ」

『その制御システムに何も書き加えることができないのです。ウイルスのコードも、他のランサーのシステムにウイルスを注入するコードも追加できません』

確かに平和だ。彼は笑みをこぼした。相手が何者か知らないが、彼女は自分のことを知っているようだ。

『ジェイ指揮官！ 何がおかしいのです』

『指揮官とつけるのはやめろ。ランサー乗りとサポートは平等な立場だ。覚えておけ』

『しかし、これでは勝てません』

ジェイは燃料をジェットに投入する。

「いや、勝てる。去年は少なくともこの方法で勝った。相手がどれだけ強大であろうと立ち向かう。それがランサーだ。しつかりサポートしてくれ」

レバーを一気に押し上げ、加速をする。久しぶりの感覚が彼を包んだ。

「やはりレースはこうでなくてはな、ユスフ」

赤い閃光が無数の槍の背後に迫る。

彼とアズールは自由を得た。白い頂を前方に望み、彼らは走っていた。

「ようやく、だな」

『うん』

白いのは山々の頂だけではない。咲き誇るエーデルワイス、そして前方を走るランサーも無い降りる雪のようだ。

「いこう。俺たちは走るだけだ。ただそれだけだ」

『タカちゃんについていくよー』

彼女がどのような思いを抱いていようが、走ればそんなこと忘れてしまう。ランサーとは、時速三、四キロの世界とは過ぎゆく一瞬に全てをかけ、前に進む。それだけのものだ。

タオに近づくほど機体が振り回される。地面にできた歪みが増えていく。

「チェシー、いくぞー！」

『ホールの出現位置の予測は完璧！ フルスロットルで行っちゃってー！』

アズールは跳ねるようにタオに近づく。

「最後の勝負だ。いくぜー！」

細い道で白と青の槍がばざり合う。お互いの姿がガラス越しに見える。タオが機体をぶつけてくる。アズールはその勢いをいなす。何度も両者は激突し、火花を散らす。白槍は果敢に攻め、蒼槍は柔らかに受け流す。

レースも大詰めに入り、道も徐々に狭くなってきた。お互い攻撃を仕掛けるのは最後だと感じた。

最後の攻防は一瞬だった。タオの体当たりをアズールはまともに受けた。そして、彼は宙を舞う。車体を勢いよく傾け、ロールする。そして着地したその先は……

彼の話を子供たちはじつ、と聞き入っていた。

「クッキー焼けたよー」

そんな時にタイミンク悪く誰かが入ってくる。仄暗いピット内にバターの豊かな香りが広がる。

「食べる食べるー！」

「オレが先ー！」

子供たちはさっきまでの話などどこへ行ったのやら、

母親の足元に群がる。

「ちよつと、どいてー。パパが先なのー」

彼は苦笑し、彼女のもとに歩み寄る。

「一枚だけでもらうよ」

「もう行っちゃうのー?」

「まあな。チェシーも用意しとけよ。ミシヤが遅いって怒ってるぞ」

「はい。と、その前にこれどうぞー」

黒いヘルメットが手渡される。その右側面には『E&S』文字が記号で繋がれたロゴが刻まれていた。それを眺めていると彼の頬に柔らかな感触が。

「行つてらっしゃい」

彼女は笑っている。彼も彼女の額に口づけをしてやる。

「ねえ、パパ。お話の続きはー?」

隅で話を聞いていた男の子が彼に近づく。はにかみながら聞いてくる子供に彼はしゃがんで目を合わせる。

「リックはランサーが好きだね。これからやるどころさ。ほら、ブースでママたちと一緒に見ていなさい」

彼は男の子の向きを変えてやる。男の子は嬉しそうにしゃがみながらピットの中に置かれた部屋の中に走っていった。

「タカちゃん、気をつけてねー」

「ああ。いっちょ走ってくる。ちゃんと戻ってくるよ」

彼は着いたランサーに乗り込む。専用のレッカーに引かれていた途中、彼は上を見上げる。

ガラスには様々な写真が貼られている。子供と一緒に写っている写真、グロリアスエレクトロニクス社の元社長と一緒にランサーチームを立ち上げた時の写真(彼はものすごく機嫌が良さそう)、白衣を着たミシヤとチェルシーの写真、チェルシーの花嫁姿。最後の一枚は思い

出深い。初優勝したグランプリの写真だ。

三位のジェイ。彼はそれ以降のアメリカから失踪したらしい。風の噂によるとユーラシア大陸のどこかで修行しながらランサーの選手を育成しているらしい。写真の中の彼は赤いマントを纏い、とても清々しい表情をしている。

二位のタオことミシヤ。彼女はグランプリの後、グロリアスエレクトロニクス社に入社し、機械製造部門で長らく主任研究員を務めた。そして数年前、社長が退職すると同時に彼の立ち上げたランサーチームに参画している。今では優秀なサポーターの一人だ。写真の中で彼女は澄ました顔をしているが、カメラから目を背けている。よっぽど悔しかったらしい。

そして、真ん中の一位の男。燕返しという異名をとり、グランプリの五連覇を達成するなど彼の名前は常にランサー業界と共にあった。タカオは現在30代後半。人生はまだ長い、反射神経が必須のランサー乗りとしてはもう老いばれた。そして今日が彼の引退日。

「最近はずっと講演ばかりしてたからなあ。お前に構ってやれなかったよ」

アズールも改修こそ重ねていたが、もう十分に旧式の機体となっていた。

「最後まで走ってくれよ」

『タカオさん。今日が最後ですね』

ミシヤの声が聞こえる。そういえば彼女の声をここで聞いたことがなかった。

「そうだな。人生はまだ長いのもう終わった気分になつてる。センチメンタルっていうのかね」

『最後にいいですか?』

「改まってどうした」

彼女は少しいよどむ。いつもの刃物のような鋭い舌鋒に似合わない仕草だ。

『あの日の私の代わりに走ってください』

「あの日?」

『最初に出会ったグランプリです。私は走ることでなく、復讐することが目的となっていました。なので』

あの日の私の代わりに。彼女は重ねて言った。彼女の心の中にも自分と同じ走ることへの快楽があったのだろうか? 彼はそこまで考えてやめた。過去のことを考えるのはらしくない。

「あの日からチェシーも乗せて走ってる。今更一人増えただって変わらねえな」

彼はイグニッションキーを差し込む。

「いいぜ。あの日のお前を未来に連れて行つてやる」

『はい!』

レースが始まる。初日は砂漠エリアだ。

『タカちゃん、レディー?』

「レディ、アズール始動!」

〈あとがき〉

アイザックです。お久しぶりです。

しばらく小説から離れていたせいか、書きたいことが多すぎて書ききれないまま最後まで来てしまいました。本当はもつと登場人物それぞれにスポットを当てて書いていくつもりでしたが、時間切れとなってしまいました。(特にジェイはなんとかならなかったのか)

次はもうちよつと整理して書いていきたい。

作中の E L F とは超極長波のことで、地球を一周するある一定の周波数のことを指します。耳の長い方々のことではありません。

今回は SF にレースを加えましたが、大友克洋の作品を見る機会があったのでその影響です。文字数的にだいぶ長くなったのですが、久々の SF ということで三文に投げます。次はディストピア書いていきたいですね。